(3) 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致

ア はじめに

若宮大路と鶴岡八幡宮を中心としたこの地域は、栄華を極めた鎌倉時代から現代に至るまでの 800 有余年の時の流れをありありと想像することができる代表的な場所であり、段葛(だんかずら)を挟んで両側に商店が並ぶ風景は鎌倉独特のものである。

そして、若宮大路に点在する昭和初期の建物を活用した商店は、こうした時代の流れの中で観光地として発展した鎌倉の姿を想起させる証人である。特に、若宮大路の中ほどに位置する湯浅物産館と三河屋本店はその代表的な例といえる。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物が鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗、教会などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情から、日本遺産で「「いざ、鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～」としてストーリーが語られているモザイク状の鎌倉の歴史、魅力を体感できる。

鶴岡八幡宮を訪れる人々や若宮大路沿道の商店などが織りなす賑わいや営みは、小町通りや若宮大路とこれを結ぶ路地、JR 鎌倉駅前にまで広がっている。

イ 鎌倉における遊山の歴史

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉には、室町幕府によって東国支配の拠点「鎌倉府」が置かれていた。その長官である鎌倉公方足利氏は禅宗に帰依し、京都とは別の五山制度を確立させるなど社寺を積極的に保護していたが、15 世紀半ばに鎌倉公方が鎌倉支配を放棄したことで、まちは衰退し、中世都市の活気は失われ、鎌倉は静かな農漁村へと変貌していった。

しかし、16 世紀に入ると、鎌倉は武家政権発祥の聖地として重視されるようになり、戦国大名の後北条氏が鶴岡八幡宮の修造を行うとともに太平寺仏殿を円覚寺に移築して舎利殿を建立、17 世紀には徳川家康が鶴岡八幡宮や建長寺など主要な社寺の復興を進めるなど、時の権力者や政権による支援などもあり、社寺も再び脚光を浴びるようになった。

そして江戸時代、泰平の世が続く中、鎌倉は、現在も知られる浄瑠璃、歌舞伎の代表的な演目の舞台として取り上げられるようになった。鎌倉時代の曾我兄弟の仇討(あだうち)を題材とする『寿曾我対面(ことぶきそがのたいめん)』などで舞台となるほか、『仮名手本忠臣蔵(かなでほんちゅうしんぐら)』のように江戸幕府をはばかって舞台を江戸から鎌倉へ置き換えて上演するものも多く、これらを通じて庶民に知られる場所となり、社寺も信仰の対象としてのみならず、江の島など景勝地の見物と結びついて遊山の対象となりはじめる。こうして鎌倉には江戸やその近郊から武士や町人など多くの遊山客が訪れることとなり、さらに賑わいを取り戻していくこととなる。

図2-16　曾我物語を題材とした錦絵

江戸時代にまとめられた鎌倉の地誌としては、徳川光圀が鎌倉を巡覧した際の記録である『鎌倉日記』や、それをもとに光圀の命で編纂された『新編鎌倉志』のほか、幕府の昌平坂学問所編纂の『新編相模国風土記稿』などが挙げられる。また、江戸時代中期に庶民が鎌倉に盛んに訪れるようになると、『鎌倉名所記』、『鎌倉絵図』など、名所めぐりに携帯するためのいわゆるガイドブックやガイドマップが盛んに出版されるようになった。

図2-17　鎌倉名所記

当時、鎌倉への参詣は、江の島詣に組み入れられることが多く、江戸を発って東海道を下り、程ヶ谷（横浜市保土ヶ谷区）から「金沢道」に入ると、梅の名所「杉田」や景勝地「金沢八景」を見物、朝夷奈切通を越えた先の「鎌倉」では、絵図を手に社寺を巡り、極楽寺坂から七里ヶ浜を抜けて「江の島」へ詣でる、あるいは、藤沢から「江の島」を詣で、海沿いを鎌倉へ向かい、その後「金沢八景」へと抜けるという道のりが一般的であった。なお、鎌倉から極楽寺坂を抜け、七里ヶ浜、腰越を通り江の島へ至る道は「江嶋道」と呼ばれ、今と変わらぬ風光明媚な景色が広がっていた。このほか、江戸から鎌倉へ至るには、東海道の戸塚宿から大船、山ノ内、巨福呂坂を経て鎌倉へと入り、名越切通を抜けて大津（横須賀市）へと続く「浦賀道」を通る場合もあった。

また、江の島は、江戸や関東一円から講を組織して大山を参詣する「大山詣（大山参り）」と対で巡拝されることも多かった。これは、大山阿夫利神社の本尊である不動明王を男神、江の島の江島神社の本尊である弁財天を女神に例え、片方だけ参拝することを忌む風潮があったためといわれる。

庶民の間に遊山が定着した文化文政期（1804～1829年）以降、東海道の名所が浮世絵に描かれるようになり、その中で度々題材となったのが、七里ヶ浜から江の島を望む風景である。七里ヶ浜から海を挟んで江の島と富士山を望むという構図が人々に好まれ、葛飾北斎や歌川広重（うたがわひろしげ）をはじめ、様々な絵師がこの題材を取り上げている。

このように、鎌倉を画題とした浮世絵も頻繁に制作された。なお、遊山については、「鎌倉遊山にみる歴史的風致」（160ページ）でも記載する。

ウ 若宮大路沿道の賑わいと発展

こうしたことを背景に、江戸やその近郊から遊山客が多く訪れるようになると、鶴岡八幡宮の参道である若宮大路の沿道には、遊山客を対象とした商店、茶屋、旅籠屋（はたごや）が軒を連ねるようになった。天保4年（1833年）に発行された十返舎一九の『諸国道中金の草鞋』（第十九編）の雪ノ下・段葛の項には、「八幡宮の前の道を雪の下といふ。茶屋、旅籠屋おほし。」とあり、挿絵からも多くの人々が通りを行き交い、往時の賑わいがうかがえる。

図2-18 往時の雪ノ下・段葛の様子（『諸国道中金の草鞋』より）

さらに近代に入ると、明治21年（1888年）に東海道線大船駅が開業、同22年（1889年）に横須賀線鎌倉駅が開業、同35年（1902年）には江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄）が開業するなど鉄道網の整備が進み、若宮大路の沿道には、観光客を対象とした宿泊、飲食、土産店が増え、観光地の賑わいを支える商業活動がさらに発展していった。これに伴い、地域の団体による段葛の桜並木の手入れ、鎌倉の特徴であった松並木の保存、清掃活動などが行われるようになった。

エ　建造物

(ア)若宮大路・段葛

鎌倉時代から都市の基軸線とされていた若宮大路は、源頼朝が寿永元年（1182 年）に妻である北条政子の安産祈願のため造ったものであり、史跡に指定されている。

若宮大路の中央には、「段葛」と呼ばれる一段高い参道が築かれており、当初は鶴岡八幡宮から鎌倉海岸に程近い一の鳥居まであったようだが、時代の流れとともに一部は平坦地となった。大正６年（1917 年）には段葛の現存部分が鶴岡八幡宮境内に改めて編入され、史跡若宮大路とは別に、史跡鶴岡八幡宮境内の一部として史跡に指定されている。

また、昭和 61 年（1986 年）には、「日本の道 100 選」のひとつに選定されている。

段葛では、平成 27 年（2015 年）11 月から平成 28 年（2016 年）２月にかけ、参道としての風致、景観の向上、桜並木の景観の回復等を目的とし、環境整備工事を実施した。大改修により、中世の骨格を踏襲する鎌倉の都市の中心線である若宮大路の歴史的景観の質が高まり、若宮大路沿道に新たな魅力と賑わいを加えている。

写真2-163　若宮大路（明治時代）

写真2-164　若宮大路
（昭和 34 年（1959 年））

写真2-165　若宮大路と
二のノ鳥居

(イ)鶴岡八幡宮　一の鳥居　二の鳥居

鶴岡八幡宮の一の鳥居・二の鳥居は段葛と並ぶ若宮大路のシンボルである。鳥居は、単なる入口を示すものではなく、神域と現世を隔てる結界であり、神聖な場所であることを示す意味を有している。

写真2-166　一の鳥居

一の鳥居は若宮大路南端側に位置し、「浜の大鳥居」とも呼ばれる。国の重要文化財に指定されており、高さ約8.5m、柱の太さは約 92cm の石造りの明神鳥居である。関東大震災で上部が破損したものの、昭和初期に一部の石を補って復旧された。柱上部には「寛文八年戊申八月十五日　御再興　鶴岡八幡宮石雙華表」(1668 年）の刻銘がある。それまでは、長らく木造だったが、寛文８年（1668 年）に第四代将軍徳川家綱によって寄進され、石造になった。

写真2-167　二の鳥居と段葛
(昭和 48 年(1973 年))

二の鳥居は現在の段葛の入り口に位置し、若宮大路を通って鶴岡八幡宮を参拝する人々を出迎える。一の鳥居と同様に、第四代将軍徳川家綱によって寄進され、石造になった。関東大震災により倒壊したため、昭和２年（1927 年）に鉄筋コンクリート造りに再建された。昭和 48 年（1973 年）の写真からも、現在と変わらない鳥居の様子が分かる。二の鳥居手前の狛犬は、昭和 36 年（1961 年）に奉納されたものである。なお、白旗神社脇の鎌倉国宝館の前庭にある「源実朝歌碑」は、関東大震災で倒壊した二の鳥居の西柱を利用している。

(ウ)湯浅物産館

湯浅物産館は、明治 30 年（1897 年）に貝細工の製造加工・卸売りの店舗として創業し、現在の建物は昭和 11 年（1936 年）に店舗兼住宅として建築されたもので、間口六間、奥行十一間半の２階建ての建築物で、若宮大路沿いの戦前の創建となる商業建築としては最大の規模のものである。

令和３年（2021 年）に登録有形文化財となった。棟札は桁行の中央、正面から３本目の棟束(むなづか)にくぎ打ちされており、その裏面に「上棟　昭和十一年七月十日　湯浅新三郎住宅」と墨書がある。また、座机はその甲板裏面に「昭和十一年十一月十五日　祝新築出入職一同」と記されている。これらにより、この建物が昭和 11 年（1936 年）７月に上棟し、同年 11 月に竣工したことが分かる。加えて、縮尺 50 分の１で１・２階の平面図を和紙に墨入れして描いた「店舗新築工事設計図」が残されており、創建時の姿を知ることができる。

横浜の貿易商社を模したという外観は、木造の建物の前に装飾を施した「看板建築」と呼ばれる形式をとっており、道路に向かって広く開放された店舗空間や店舗中央に設けられたトップライトなどの建物内部も、往時の建築的特徴をよく示している。

写真2-169 湯浅物産館

写真2-168 店舗天井・吹抜

(エ)三河屋本店

三河屋本店は、明治 33 年（1900 年）創業の酒店で、伝統的な出桁造りの店構えが、若宮大路の沿道でひときわ目を引く存在である。この建物は、この地で酒店を営んでいた竹内福蔵が、関東大震災で倒壊した建物に代えて昭和２年（1927 年）に建てたものであり、建設年の根拠は、棟木の墨書および「昭和二年　新築工事控　弐月より」と表書きされた和綴の帳面の存在である。墨書は、住宅棟の南北に通る棟木の下端部に北側から「上棟昭和二年六月二日　竹内福蔵」と記されたものであり、「新築工事控」は、昭和２年（1927 年）２月から 10 月までの各月の工事経費を項目別に細かに記したものである。この二つの史料により、三河屋酒店が昭和２年（1927 年）２月に起工、６月に上棟し、同年 10 月に竣工したことが分かる。

写真2-170　三河屋本店

写真2-171　トロッコ用レール

伝統的な出桁造りの母屋、蔵、そしてトロッコ及びトロッコ用レールなど、戦前の商店の姿がそろって残り、使われている三河屋本店は、建築史的・民俗史的に見ても、鎌倉の戦前の商店建築を代表する貴重な建物といえる。平成 18 年（2006 年）に登録有形文化財となっている。

オ 活動

(ア)若宮大路沿道の賑わいと商店の営み

若宮大路沿道周辺は、１年を通して修学旅行や遠足に来た学生、観光客で賑わっている。若宮大路の中央に位置する段葛を通り、鶴岡八幡宮に参拝し、帰りに若宮大路や小町通りに並ぶ土産物店、飲食店などに立ち寄る人々の様子は、若宮大路周辺の賑わいを感じられる鎌倉らしい光景である。昭和 45 年（1970 年）の写真からも、現在のような活気を感じることができる。

写真2-172 賑わう若宮大路
（昭和 45 年(1970 年)）

特に、若宮大路沿道には、古くから営業を続ける老舗店舗があり、鎌倉らしい風情を醸し出している。例えば、鶴岡八幡宮の一の鳥居横にある鎌倉彫の老舗の博古堂は、明治３年（1900 年）頃から現在の場所で店舗兼工房を構えている。職人の手仕事による鎌倉彫の美しさと伝統技術を今に伝える店舗として地域に深く根ざしている。

写真2-173 若宮大路の土産物屋に立ち寄る人々
（昭和 42 年(1967 年)）

また、明治 27 年（1894 年）創業の和菓子店の豊島屋は、関東大震災後から若宮大路の現在の地に本店を構えている。豊島屋の代表銘菓で 120 年以上の歴史がある「鳩サブレー」は、観光客をはじめ多くの人々に親しまれており、目印の鳩が描かれた袋を提げて観光を楽しむ観光客の姿を鎌倉の各地で見ることができる。

若宮大路沿道には、このような鎌倉を代表する老舗店舗や、三河屋本店や湯浅物産館などの歴史的建造物が現代的な店舗と一緒に並んでおり、その風情から、日本遺産のコンセプトであるモザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる。

写真2-174 豊島屋本店
（昭和 20 年代(1945 年頃)後半）

写真2-175 豊島屋の袋を提げて若宮大路を歩く人々

（イ）若宮大路沿道における住民・沿道における活動

鶴岡八幡宮から海に至る軸線となる若宮大路の環境や風格を保とうと、住民や地域のボランティア団体のよる美化活動が継続して行われている。昭和54年（1979年）発行の『ふるさとの想い出　写真集明大昭鎌倉』によると、戦時中には、小学生が道路清掃を行っていた様子などが写真で残されており、鎌倉市民にとって、昔から若宮大路が特別な存在であったことがうかがえる。

写真2-176　小学生の道路清掃（戦時中）

鎌倉のシンボルともいえる若宮大路やその周辺における活動の先駆けとしては、鎌倉同人会による松並木の保全活動が挙げられる。明治時代の終わり頃の若宮大路の絵ハガキには、巨木の松が鬱蒼と続く「松並木」の風景が記録されている。しかし、虫害による松枯れが急増したため、当時鎌倉でまちづくり活動をしていた鎌倉同人会（詳細は「別荘文化に由来する歴史的風致」に記載）は大正４年（1915年）から、踏み荒らされてしまった根方を玉石と芝で土寄せし、周囲を焼き丸太と太い針金で囲うなどの保護活動を開始した。大正12年（1923年）の関東大震災により若宮大路の松並木の大半が焼失してしまったことを受け、同会は大正14年（1925年）に若木100本を植栽し、さらに昭和６年（1931年）には、松の根方を守るための囲いを、鉄筋コンクリート製の柱と太い鉄製の鎖による防護柵に改修した。昭和30年（1955年）に人や自動車の往来が急増したため、若宮大路に歩道を作る計画が持ち上がり、保護柵の石柱は一部を除き撤去された。平成26年（2014年）から始まった段葛の改修工事の際、当時の石柱が発見され、段葛に記念碑として残されている。

写真2-178　鎌倉八幡宮前松並木
（明治時代）

写真2-177　鎌倉同人会による
松並木防護柵の石柱跡
（昭和55年（1980年））

その後、若宮大路の松並木は、数本を残すのみとなってしまったが、近年、市民団体や地元町内会により松並木の植樹が行われ、往時を思わせるような景色を見ることができるようになった。

写真2-179　若宮大路の松

また、昭和55年（1980年）の新聞記事には、当時豊島屋の社長であった久保田雅彦が

豊島屋本店前の若宮大路沿道に自費で黒松を植えたことが書かれており、若宮大路の景観が地域の人に大切にされていたことが分かる。

こうした活動はその後も受け継がれ、昭和 49 年（1974 年）からは商店会メンバーを軸とした鎌倉みどりの会により若宮大路の桜並木の保全・若宮大路の美化活動が行われた。その功績を踏まえ、平成 13 年（2001 年）の緑の都市賞では、同会の長年の若宮大路周辺での緑化活動に対し、「都市緑化基金賞」を受けた。

現在は、さらに同じ志を持つ団体や企業などが加わり、若宮大路において定期的な清掃や植栽の手入れなどの美化活動が継続して実施されている。なお、若宮大路では、グリーンバード鎌倉などの市民等の有志による団体が、市のアダプトプログラムの登録を得て、清掃活動や花植え活動などを継続的に行っている。

若宮大路沿道では、これらの市民団体や地元商店街、地域の人々による清掃活動、美化活動を見ることができ、鎌倉の財産として若宮大路の景観や風情を残そうとする人々の思いを感じることができる。

(ウ) ぼんぼり祭

a　鶴岡八幡宮（段葛・参道）・小町通り

鶴岡八幡宮のぼんぼり祭は、毎年立秋の前日から８月９日まで、境内がぼんぼりのあたたかな光で照らされ、幻想的な光景を見ることができる。また、夕刻頃からぼんぼりを見ようと鶴岡八幡宮へ向かう人が多く集まり、若宮大路周辺は、賑わいを感じることができる。なお、鶴岡八幡宮のぼんぼり祭については、社寺の祭礼・行事であることから、「社寺における祭礼・行事・信仰にみる歴史的風致」（(1)　社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致（66 ページ））において詳しく記載している。

写真2-180　小町通りのぼんぼり祭

同時期に小町通りでも、地域の子供たち等が描いたぼんぼりが掲出される。鶴岡八幡宮のぼんぼり祭は、小町通り沿道にも裾野が広がり、地域の賑わいを演出している。

b　御成通り

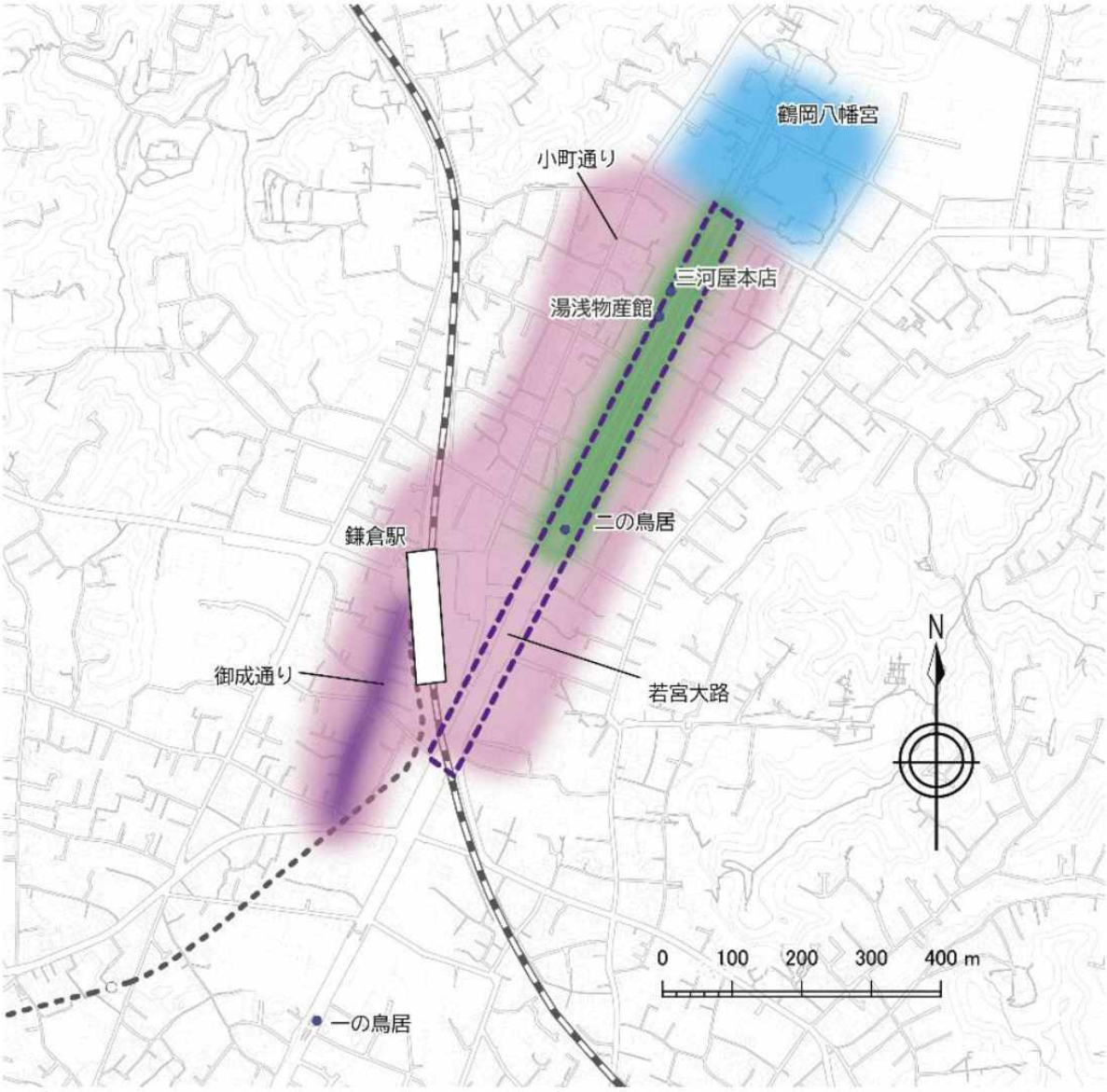
御成通りで行われるぼんぼり祭は、鶴岡八幡宮や小町通りとは異なり、毎年７月末の週末に開催される。ぼんぼりの柄は一般公募で集められた力作が揃い、約 260 枚の絵柄を使用した約 90 基のぼんぼりが通りを彩る。昭和 49 年（1974 年）から始まり、幻想的な夏の夜を演出する。御成通りのぼんぼり祭では、祭りを協賛する店舗が気に入ったぼんぼりに店舗名の入った賞札を付ける。後日、賞札が付けられた絵柄の作成者には協賛の店舗の賞

品が配られる。また、ぼんぼりの掲出だけでなく、昼間から子供向けのイベントが開催される。

御成通りのぼんぼり祭は、鎌倉の夏の風物詩として地域の人々に親しまれており、祭りの時期には、昼には子供たちの楽しそうな声が聞こえ、夜には賑わう人々がぼんぼりの光でオレンジ色に照らされる光景が見られる。

写真2-182 御成通りのぼんぼり祭
（昭和 48 年(1973 年)）

写真2-181 御成通りのぼんぼり祭



	歴史的風致を形成する建造物	
	若宮大路沿道の賑わいと商店の営みが感じられる範囲	
	若宮大路沿道における住民の活動が見られる範囲	
	ぼんぼり祭の実施範囲	鶴岡八幡宮
		御成通り

図2-19 若宮大路周辺における営みの市街地への広がり

表2-7　若宮大路沿道における営みに関する主な活動の年表

活動種別	実施主体	大正9年以前 1920年以前	昭和5年 1930年	昭和15年 1940年	昭和25年 1950年	昭和35年 1960年	昭和45年 1970年	昭和55年 1980年	平成2年 1990年	平成12年 2000年	平成22年 2010年	令和2年 2020年	現在
若宮大路沿道の賑わいと商店の営み	各商店	湯浅物産館の土産物店としての商い											
		三河屋本店の酒屋としての商い											
		博古堂　鎌倉彫店としての商い											
		豊島屋　菓子店としての商い											
若宮大路沿道における住民・商店会などの営み	鎌倉同人会	丸太等による松の保護活動		松の防護柵の改修							松の保護及び美化活動		
	鎌倉みどりの会						若宮大路の桜並木保全・若宮大路の美化活動						
	アダプトプログラム登録団体など									若宮大路の清掃活動			
ぼんぼり祭り	鶴岡八幡宮			鶴岡八幡宮のぼんぼり祭りの開催									
	鎌倉御成商店街協同組合					御成通りのぼんぼり祭りの開催							

カ まとめ

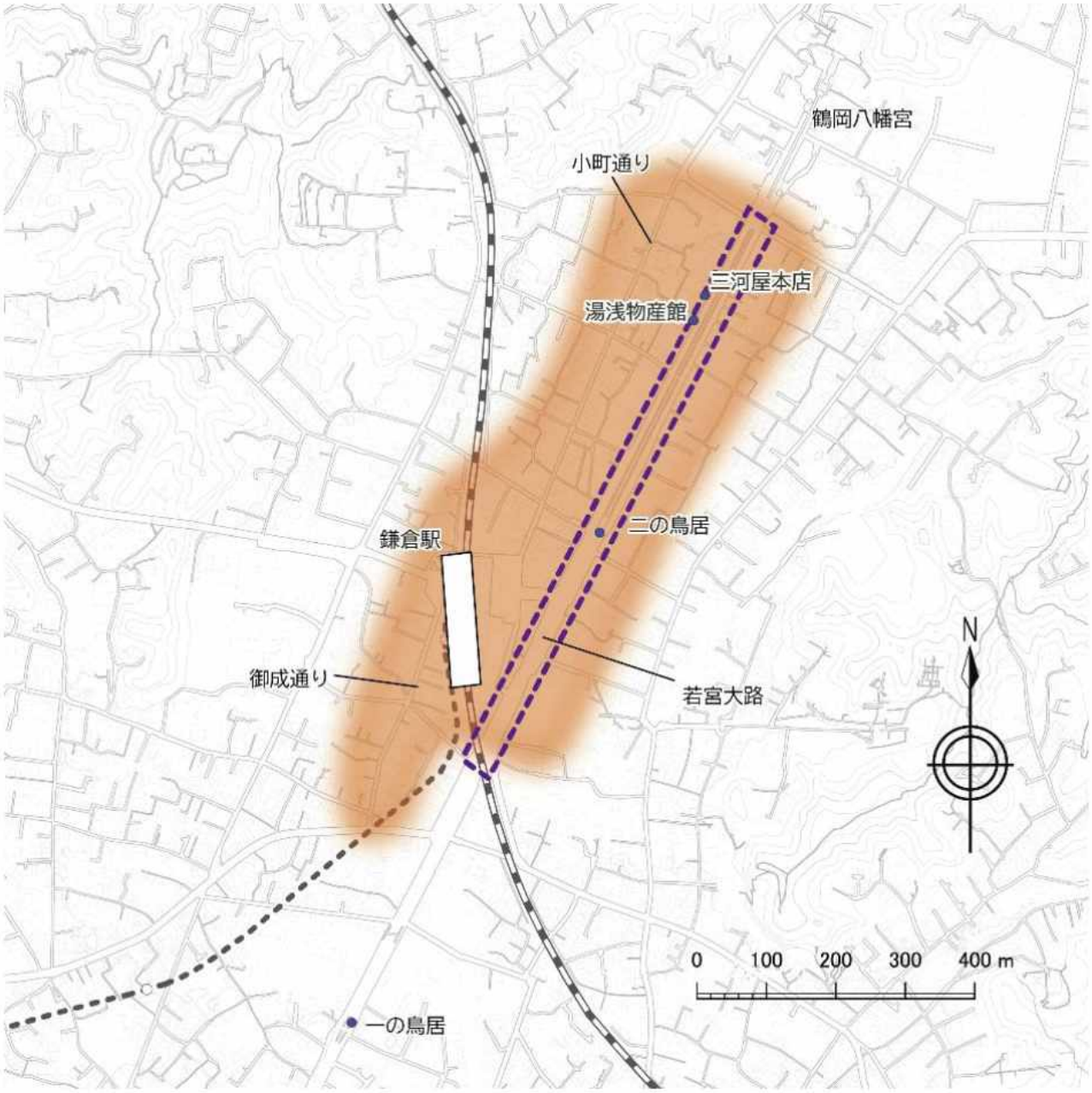
このように多くの観光客が訪れる鎌倉駅東口から鶴岡八幡宮に至る地域には、参道である若宮大路を基軸として、格子状に路地が交わり、市景観重要建築物等をはじめとする多くの人に愛される「鎌倉らしい建物」が存在している。新旧の建築物等が調和する形で多くの商店が軒を連ね、古くから観光地として発展してきた鎌倉の人々の営みの歴史を今に伝えている。その設えと営みは、通りを歩く人々を惹きつける魅力をもっている。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物や鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情は日本遺産のストーリーにも描かれているような、モザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる場所である。

鎌倉の夏の風物詩の１つである「ぼんぼり祭」は、鎌倉の風情を強く感じられるものであり、幻想的な情景は訪れる人に深い感銘を与えている。

また、若宮大路沿道の商いは、これとほぼ平行に走る小町通りや鎌倉駅前、鎌倉駅西口側の御成通りなどにも面的な広がりを見せ、観光客を対象とした土産物店・飲食店が多く立ち並び、年間を通じて賑わいをみせており、地域で営まれている商業活動はまちに活力を与え、首都圏屈指の一大観光都市として年間約 1,600 万人もの人々が訪れる鎌倉を支えている。

こうした若宮大路沿道における営みが調和することにより、訪れる人々にとっても、鎌倉ならではの歴史と暮らしが重なり合う歴史的風致が形づくられている。



	歴史的風致を形成する建造物
	若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致の範囲

図2-20 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致の範囲